演劇表現研究室（花輪　充先生）

▸花輪充先生はどのような研究や活動に取り組んでいますか？

現在私は、「保育内容における演劇表現の有用性と課題」をテーマとして３つの研究活動に取り組んでいます。

一つ目が、「乳幼児のための演劇体験」に関する研究です。2016 年よりイタリアのボローニャで開催されている『乳幼児のために国際演劇祭』に参加し、演劇体験が乳幼児にもたらす成果と課題について調査研究を続けています。日本と欧米では、子どものために演劇に対する認識に大きな隔たりがあります。2016 年次は他国の劇を鑑賞する立場をとっていましたが、2018 年には、現地の保育士を対象にしたプロジェクテッド・プレイ「アニメイム」(関矢幸雄発案)のワークショップを行い、現地の保育者の演劇表現に対するパフォーマンス・パラダイム(パフォーマンスに対する思考の枠組み)を肌で感じ、2019 年には、劇団かかし座のパフォーマーを演劇祭に同行させ、演劇祭参加のパフォーマーや現地の保育者を対象として、ハンド・シャドウ(手影絵)のデモンストレーション(花輪監修)を披露することで、ノンバーバル・コミュニケーションの可能性と共感性に改めて気づかされました。現在、こうした取り組みは新型コロナウイルスの世界的感染拡大によって休止中ですが、今後も継続すべき重要なものであると思っています。

二つ目は、「ドラマとシアター」に関する研究活動です。ドラマは劇あそびと訳されることが多いですが、その意味することは、劇あそびはまさしくあそびであって、子どもに演劇をやらせることとは違う、ということ。すなわち、誰かにみせる劇、いわば、シアター(劇)とは違う性質のものであるということです。日本では伝統的に、教師が児童に劇を仕込んで、親や児童仲間に見せる、全てをそこに集約するといった傾向が強いようですが、乳幼児期における劇活動は、学校で行う学芸会とは区別して、“劇あそび”としての立場を目指さなければならないのではないかと考えています。そのためには、学生時代に演劇表現のダイナミズムに直接コンタクトすることが必要となります。なぜなら、音楽表現や造形表現と比べて、みなさんの演劇表現の経験は決して多くないからです。少なくとも学生時代にドラマとシアターの違いを体感することは、両者の特性を具体的に理解する上でとても重要です。それこそ、乳幼児のための演劇のあり方を考える上で欠かせぬ知見となることでしょう。

（関連科目/児童学科 4 年次「卒業研究」、3 年次「演劇表演」、保育科 2 年次「演劇表現」）

三つ目は、「シアターの創作と実演」を巡っての研究活動です。シアターは、「総合芸術」とか「多様の中の統一」とか呼ばれていますが、ここでは、文学、音楽、造形、歌唱、舞踊、演技などを総合したミュージカルの創作と実演を目指します。とはいっても、総合の意味を各芸術分野が足し算されることではありませんし、本棚に並ぶ著書のような存在でもありません。それはまるで蛹から蝶になる変態の過程に例えるのが相応しいかもしれません。要する、溶け込む、交じり合う、融合すると考えたほうがいいでしょう。ところでミュージカルの創作の過程は冒険の旅とも例えられるでしょう。襲い来る不安や葛藤を越え、計り知れぬ知識と、振幅の広い体験に出会ったときの感動は言葉では言い尽くせません。やがて保育現場において演劇表現の両義性を問われた時、これらの経験は決して無駄にはならないでしょう。

（関連科目/保育科 2 年次「保育総合表現」）

▸この研究室やゼミ（４年次）のことについて教えてください。

私のゼミは、卒業制作と卒業論文にかかわるグループに分けられます。卒業制作では、これまで、「劇あそび(Story drama)」、「朗読劇(Readers theater)」、「人形劇(Puppet play)」、「参加劇(Participation play)」、「音楽劇(Musical)」、「即興劇(Improvisation)」等の創作と実演などが行われてきました。いずれもが、乳幼児や学童を対象にしたものであり、近隣の保育園や幼稚園、児童館等で実践されてきました。共同研究として行われてきたものがほとんどです。一方、卒業論文では、「子どもと演劇との出会い-劇あそびの体験が子どもに与える影響と効果-」、「保育所・幼稚園における劇あそびの研究-創造性を育む保育者の役割-」、「幼稚園・保育園における劇的表現活動の研究-劇あそびの意義とその実践における 保育者の役割、環境構成を探る」、「子どものためのダンス教育と表記法-バロックダンスを舞踏譜から探る-」、「子どもの遊び環境に関する研究-テーマパークの役割と存在価値」などがあります。「演劇表現」と言っても一口で語れるものではありません。

ゼミ生の皆さんには、はじめに、学習会において、表現活動の意義、表現活動の構造、表現力の発達、演劇と教育についての理解を深めていただきます。そこで、これから取り組む自身の研究テーマを明確にしてもらうとともに、仲間同士が互いに学びあえる土壌をつくり、協働的なかかわりがもてるようにしています。

▸もっと知りたい方へ（参考資料）

【論文等】

・「『遊びのなかの演劇』を土台とする劇あそびの意義-子どもと保育者の協同的なかかわりに着目して-」幼小年教育研究所研究紀要第 2 号、2022.6

・「保育者養成における表現力の育成と方略について-対話的思考による創造性の活性化を考える-」教職センター年報 第 12 号 2022.2

・「2020 ミュージカル創作の舞台裏-パンデミック下における「保育総合表現」の授業実践を支えた方略」教員養成教育推進室年報 第 11 号 2021.2

【著作等】

・保育科「保育総合表現」ミュージカル台本
2011 年度:『Come on Smiling!元気よく!! 晴れやかに! 明日に向かって!』/2012 年度:『I'll Try Anythig !!~今、みなぎる。』/2013 年度:『ドロシーの大冒険』/2014 年度:『アラジン』/2015 年度:『Dreaming ~卒業』/2016 年度:『イーハトーブの童話劇』/2017 年度:『Heart is won by heart! ~人生、意気に感ず!』/2018 年度:『ピノッキオの大冒険』/2019 年度:『リックとグエンディ』/2020 年度:『"24 Lovely Girls ♪あ~した、元気にな~れ"』/2021 年度:『チルチル・ミチルの Go!Fantasy』/2022 年度:『Little Prince』

【社会活動】

・劇団かかし座『オズの魔法使い with オーケストラ』(厚生労働省社会保障審議会推薦児童 福祉文化財)脚本・演出